

第8章 まとめ

ストラディヴァリウスより優れたバイオリンを現在まだ製作することができないということは周知の事実である。ニスに秘密があるとか、当時のように良い木材がないからだとかその他いろいろの理由が挙げられている。しかし、最も大きな理由は、ストラディヴァリウスの音を評価する心理測定法と物理測定法のいずれもが、その評価結果を用いて楽器音を十分に改良できるまでは確立していないことであると考えられる。このことは、第3章、第4章で述べたように、いずれの測定法にも未解決の問題を多く残しているからであり、これらの問題が十分に解明されなければ一般に楽器の音の真の評価は出来ないからである。

このように、多くの楽器の音の評価は現在まだ不完全な状態にある。これは丁度約30年前の音声に関する評価の状況とよく似ているといえる。これまで発表されている楽器音についての評価結果は、比較的単純なものや楽器メーカーが特に力を入れて究明したものを除けば、その殆どが楽器音のある一面のみについてのものか、または全く科学的方法を逸脱しており信頼性の欠けたものかのいずれかであった。このような研究結果に基づいては良い楽器を製作することが出来ないことはいうまでもない。

一般に公表されてはいないが、いくつかの楽器メーカーでは、良い楽器を製作するための懸命な研究が行なわれていることは、その製品の音が次第に良くなってきているという一般社会の評価から推測できる。例えば、我が国の一部のピアノや管楽器の音の音色が世界的にみて相当な水準に達しようとしていることにより、それらの楽器メーカーで体系化された有効な音の評価が行なわれつつあるものと推察できる。

しかし、いずれにしても多くの場合に、音の評価が不完全な状態にある現状において、本委員会が音の評価システムについての調査研究を3年近くにわたって行い、前回の報告書に次いで「音の評価システムに関する調査研究報告書」第2報をここに発行することは、楽器音のみならず一般のすべての音の評価に関しても寄与できるものと信じている。この報告書に音の評価に関するすべての問題を網羅することは出来なかったが、主な基本的問題は取り上げてあるものと考えている。

なお、ここに前回の報告書と今回の第2報の執筆者一覧表を記しておく。

音の評価システムに関する調査研究報告書（昭和61年12月）

はじめに 北村 音一
第1章 音の諸側面と音色 北村 音一

第2章 評価について

2. 1 測定と評価 梅本 堯夫
2. 2 認知心理学的アプローチ 梅本 堯夫
2. 3 評価の要件 平賀 譲
2. 4 物理的尺度と心理的尺度 平賀 譲
2. 5 評価システムの決定要因 平賀 譲

第3章 評価方法

- | | |
|-------------|-------------|
| 3.1 心理的評価方法 | 難波精一郎 |
| 3.2 物理的評価方法 | 大串 健吾 |
| 3.3 評定者 | 北村 音一・小谷津孝明 |

第4章 評価システム

平賀 讓

第5章 今後の課題

北村 音一

音の評価システムに関する調査研究報告書 第2報 (昭和63年3月)

第1章 評価の基本的考え方

- | | |
|---------------------|-------|
| 1.1 音色評価の基本構造 | 小谷津孝明 |
| 1.2 音色表現語解釈の個人差軽減対策 | 小谷津孝明 |
| 1.3 評価システムと目的性 | 小谷津孝明 |
| 1.4 評価の具体的内容 | 北村 音一 |
| 1.5 楽器の評価のあり方 | 北村 音一 |

第2章 評価方法における問題点

- | | |
|------------|-------|
| 2.1 心理的問題点 | 難波精一郎 |
| 2.2 物理的問題点 | 北村 音一 |

第3章 音の評価によく用いられる心理測定法及びこれに関連した事項

- | | |
|----------------|-------------|
| 3.1 SD法 | 梅本 堯夫・難波精一郎 |
| 3.2 MDS法 | 大串 健吾・難波精一郎 |
| 3.3 全音検査法 | 小谷津孝明 |
| 3.4 一対比較法 | 難波精一郎 |
| 3.5 音色表現語の階層分析 | 上田 和夫 |

第4章 物理的評価の方法

大串 健吾

第5章 評価基準の定め方

難波精一郎

第6章 評価システムの構成

平賀 讓

第7章 評価システムの実例

北村 音一

第8章 まとめ

北村 音一